

中国のほんの話(46)

中国の亡霊説話

蔭山 達弥

日本人にとって、夏の風物詩と言えば、蝉時雨、朝顔の花、風鈴の音色、金魚すくい、納涼花火大会等、数え上げれば限りがないが、お盆が近づくと映画や舞台上映（上演）される「怪談」を忘れてはなるまい。

この8月、アンソロジストの東雅夫氏の編集による『文豪てのひら怪談』（ポプラ文庫）が出版された。本書は遠く中国六朝時代（3世紀～6世紀）の志怪小説や、わが国の『古事記』に始まり、平成日本の幻想文学にいたるまで、1800年余りの長きにわたる和漢の文芸から、800字を目安にして、妖しく不思議な物語を拾い集めたアンソロジーである。

わが国でいう幽霊のことを、中国語では「鬼」（gui、クイ）という。「鬼」という言葉は古くは中国語の意味と同じであった。『日本書紀』にその例が見られる。その後、わが国では「おに」という言葉は中国語の「鬼」とは全く別なものをさす言葉に変わっていった。

作家・中国文学者であった故駒田信二氏は自著『中国怪奇物語 幽霊編』（講談社文庫1982）のあとがきの中で、日本の幽霊と中国の亡霊を比較して、次のように述べておられる。「中国では幽魂、幽霊、亡魂、亡霊などが人間としての形をあらわしたものを「鬼」という（中略）わが国の幽霊にもさまざまな形のものがあり、一概にはいえないけれども、大半は、怨みを報いようとしてこの世にあらわれてくる怨霊（おんりょう）であって、身の毛もよだつようなおそろしい形相をしていることになっている。一方、中国の「鬼」は、多くは若い娘の亡霊で、この世の人間を恋い慕って情交を求めてくる。その姿かたちはこの世の人間と少しもかわらないばかりか、情緒纏綿（てんめん）たる絶世の美女であることが多い。従って人間は亡霊をおそれるところか、そのあらわれるのを待ち望んで契りを結ぶ話（唐『才鬼記』、「州長官の娘」）や、亡霊との別れをかなしむ話（六朝『搜神記』、「赤い上着」）や、再会の約束をはたそうとする話（唐『西陽雜俎』、「夫人の墓」）なども少なくはない。なかには情交した相手の人間の助けによって人間に生きかえる亡霊（唐『広異記』、「生きかえた娘」）や、子供を生む亡霊（「赤い上着」）、孕（みごも）ったままで死んで墓の中で子を生み育てる亡霊（宋『夷堅



志』、「餅を買う女」）、寺僧と密通して子をはらむ亡霊（宋『夷堅志』、「孕った娘」）などもある。だが一般には、人間は亡霊と情交しつづけていると次第に陽の気を吸いとられてついには死ぬ、というのが中国の亡霊説話の主流で、なかには一夜の情交だけで死ぬもの（六朝『搜神記』、「汝陽の宿」）もある。情交を絶ったために死をまねがれる話もあり、道士の法術によって救われる話（「州長官の娘」）も、法術をまもらずに死ぬ話（宋『夷堅志』、「床下の女」）もある。（以下略）

本書『中国怪奇物語 幽霊編』には中国の「志怪」系統の「鬼」に関する81篇の説話が集められている。中国では亡霊たちが思いのままこの世に現れ、人間たちもあの世に旅して帰るのである。

さて、中国の怪談（『聊斎志異』）と出会って中国文学に目覚め、ついには独自の翻訳を始めた、話梅子（フアメイズ）さんという人がいる。話梅子とは「話梅」という梅を乾かして砂糖をまぶした中国のお茶漬けにちなんだ名前とか。

話梅子さんの5冊目になる編訳書『棺中の妻』（2009.7.25）が、『中国怪談』に続き角川ホラー文庫から出た。話梅子さんのあとがきによると、本書は唐代伝奇を1篇、明代白話小説を5篇、清代文言小説を6篇選び、原文に忠実な翻訳ではなく、読みやすくするために話の筋を変えない程度に手を加えてあるとのこと。

ともあれ、灼熱の夏の余韻がまだ冷めやらぬ秋の夜長、中国の怪談を手にとって一読されては、いかがだろうか？ 奇想天外な物語に、きっと夜の更けるのも忘れることだろう。

かげやま たつや（教授・中国文学）